

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校	
人権課題	子ども・女性・高齢者 ・障害者・外国人	対象学年・ 取り扱った教科等	第1学年・LHR	時数等 2
目標・人権教育のねらい	<p>人権教育は、学校生活の中でさまざまな個性や価値観に出会い、一人ひとりの感じ方の違い・考え方の違いに気づき、お互いの違いを認め尊重できる姿勢を身につける。</p> <p>そこで、中学校までの人権学習を振り返り、改めて「人権とは何か」ということについて具体的に考えることで、人権感覚を磨き、差別の芽に気づく力を培う。</p>			
実施した内容	<p>各HR教室にて、そもそも人権とは何かを考える時間をとった。そのあと動画を2つ見ながら「アンコンシャスバイアス」について学び、自分の言動を振り返る時間を設けることで、自分の無意識の感覚意識を省みる機会を持った。</p>			
工夫した点	<p>知的理解を促しながら考えさせることを目標にし、生徒が自ら理解を深めていくのに最も効果的なたちとなるよう、授業を構成した。その際、昨年度教材の視聴が長く、生徒が意見を交流する時間を十分に確保することができなかったという反省から、内容を厳選した。また、TVCMを活用することで、自分自身に身近なところに課題があるという意識が持てるようにした。</p> <p>本校は総合学科として「産業社会と人間」という授業があり、1年生全員が自分の将来について真剣に考える。大学の専攻分野を選択する際、性別によって進路を決めてしまう場面を見せることで、無意識に持っている偏った見方について、自分に引き付けて考えられるよう工夫した。</p>			

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

特別活動・産業社会と人間

事業成果

知識的側面

アンコンシャスバイアスについて、事前アンケートでは90%弱の生徒が「まったく知らない」と答えたが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が95%、「とても興味が持てた」「興味が持てた」と答えた生徒が93%、「新しいことをたくさん知ることができた」「少し知ることができた」と答えた生徒が96%と高い評価を得た。このことから、理解を深めることができたと考えられる。

価値・態度的側面

事前アンケートでは「アンコンシャスバイアス」について意識した（考えた）ことがあると答えた生徒は2%弱であったが、事後アンケートでは、自分自身（の経験）と結び付けて「よく考えられた」「少しは考えられた」と答えた生徒が95%であった。このことから、自分の無意識の感覚について省みる機会となったと考えられる。

技能的側面

事前アンケートでは約98%の生徒が「アンコンシャスバイアス」について意識した（考えた）ことがないと回答していたが、事後アンケートでは、今日学んだ内容を今後「大いに活かそう」「少しは活かそう」と答えた生徒が98%であった。振り返りの中で「自分の言動には気を付けたい」であったり「そういった目（アンコンシャスバイアスがかかってないか）でTVCMにも注目したい」といった意見が見られたことから、実施内容が響いていると考えられる。また、2年次系列選択の場で、アンコンシャスバイアスの存在に意識しながら、自らの将来像について深く考えることができた。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・ 指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校	
人権課題	子ども・女性・高齢者・ 障害者・外国人・同和問題	対象学年・ 取り扱った教科等	第3学年・LHR	時数等 2
目標・人権教育のねらい	<p>アンコンシャスバイアスについて知ること、さまざまな人権課題に対して自分にできることは何なのかを考えることができる。</p> <p>また、身近に迫った進路決定において実際にあった差別と差別解消の歴史を学ぶことで、人権感覚を磨き、差別に立ち向かう力を養う。</p>			
実施した内容	<p>1 限：動画を見ながら「アンコンシャスバイアス」について学び、自分の言動を振り返る時間を設けることで、自分では意識していないことを省みる機会を持った。</p> <p>2 限：滋賀県進路保障協議会から講師を招き、就職差別問題と進路保障というテーマで講演をしていただいた。</p>			
工夫した点	<p>1 限目では、TVCMを通して、子育ては女性がするものであるという無意識の思い込みを題材に取り上げることで、アンコンシャスバイアスが誰にでも起こりうる身近な問題であるということ意識できるようにした。また、そこで自分の中にもアンコンシャスバイアスがあることを振り返ることができた。アンコンシャスバイアスについては、これまでも学習する機会もあったと考えられる。単に知的理解にとどまらないものとするために、個人の中に深くつながっていきたいと思い、補足説明や考える時間をとった。</p> <p>2 限目の講演では、途中で、講師と国際情報高校教員との面接のロールプレイを見せることで、バイアスがかかる場面をより具体的に生徒にイメージできるようにした。本校では、就職する生徒、進学する生徒が入り混じっている。特定の進路に限定するのではなく、「自分に深くかわること」として人権を捉えられるように、講師や学年団と丁寧な打ち合わせをして取り組んだ。</p>			

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

特別活動・総合的な探究の時間

事業成果

知識的側面

アンコンシャスバイアスについて、事前アンケートでは約98%の生徒が「知らない」と答えたが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が93%、「とても興味が持てた」「少し興味が持てた」と答えた生徒が86%、「新しいことを知ることができた」が90%と理解を深めることができたと考えられる。

また、進路保障と人権の講演については、事前アンケートで92%の生徒が「知らない」と答えたが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が94%、「新しいことを知ることができた」が96%であった。こうしたことから、こちらも理解を深めることができたと考えられる。

価値・態度的側面

1限の学習について、自分自身の経験と結びつけて考えられたと答えた生徒が90%と、学習を通して自分を省みることができたと考えられる。また講演についても、「自分自身と結びつけて考えられた」と答えた生徒が91%となり、自分の将来（進路）と結びつけて学び考えることができたと言える。

技能的側面

アンコンシャスバイアスについて、今後に活かせそうと答えた生徒が100%、講演についても今後に活かせそうと答えた生徒が100%であった。また振り返りの中で「偏見や差別などに対して、より意識したい」という決意が多く見られた。今年度も不適正質問の報告はなかったが、振り返りの中で「不適正質問にどのように対処すれば良いかがわかった」という意見が見られた。また、就職試験後に「このような不適正かもしれない質問がありました。」と生徒からの報告もあり、不適正質問を意識した態度が見られた。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校	
人権課題	子ども・女性・HIV感染者等・「性と生命」の問題	対象学年・取り扱った教科等	第2学年・LHR	時数等
				4
目標・人権教育のねらい	海外（ケニア）の現状、エイズの現状を知るとともに、「性」については、個々で考え方が異なること、「自分らしく生きるとは」について考え、「性」と「人権」のつながりを学ぶことで、他者や自己の人権について考え、一人ひとりのかけがえのない生命の在り方に向き合っていこうとする意識と態度につなげる。			
実施した内容	青年海外協力隊としての経験がある方を講師として招き、海外（ケニア）の現状を知ること、異文化について学ぶだけでなく、自分の中にある偏見について考えた。クイズや画像、現地の写真を見せたり、ワークショップを行ったりすることで、すべての生徒が子どもや女性の人権、性と生命、HIV感染症について考える機会が持てた。			
工夫した点	講師と事前に相談を重ね、講演の中で液の交換ワークショップを取り入れ、生徒が実際に体験し学ぶ機会を設けた。事前アンケートや事後の振り返りを行うことで、じっくりと振り返って考える機会の確保をねらった。「性と生命」の問題は、ともすれば家庭科や保健体育科、生物の授業で扱えばよいと考えられがちである。しかし、「性と生命」の問題は、人間の根源的な問題であるとの認識を学年団と共有し、取り組むことができた。また、現地の写真や1日に食べるのに必要なお金など、具体的な数字データを示すことで、自分たちとは違う文化について理解を深められるよう工夫した。			

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

保健体育・家庭

事業成果

知識的側面

異文化理解について、事前アンケートでは「(そのような言葉を)まったく聞いたことがない」と答えた生徒が20%いたが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が約98%、「興味が持てた」と答えた生徒が90%、「新しいことを知ることができた」と答えた生徒が約92%と、理解を深めることができた。また、事前アンケートでは「ケニアのイメージ」に対して、「サバンナ、野生生物、アフリカゾウ、貧困、発展途上国」といった回答が見られたが、事後アンケートでは「ケニアの現状について印象が変わった」「自分が考えていたよりも発展している地域があって驚いた。」と答えた生徒が多く見られた。

価値・態度的側面

「自分自身(の経験)と結びつけて考えられた」と答えた生徒が約96%、印象が変わったものとして、「ケニアの現状」、「HIV感染の現状」、「日本のHIV感染者の話」などが挙げられていたことから、漠然と知っていたことについて具体的に知ることができ、見聞を広めることができたと考える。講師の実体験に基づいた話が生徒の心に直接響いたこと、写真を見せることで具体的に想像できたこと、ワークショップに参加したことで体感できたことが、生徒の価値・態度的側面に良い影響を与えたと考える。

技能的側面

講演の内容を今後に活かせそうと答えた生徒が約97%であった。また、印象に残った内容でも、液の交換ワークショップを挙げている生徒が多く、ワークショップを通して、エイズの怖さや広がり方についてわかりやすく体感し、深く考えることができた。また、振り返りから、「自分の体より生活を優先する人が世界にいると知った。」・「貧困が酷すぎて体を売ってしまう人もいるんだと思った。」といった意見が見られるなど、「性産業」についても深く考えられた様子が見られた。今後、自分の性にかかわる行動についても「よく考えて行動したい」という意見が多く見られたことから、自らの身体、相手の身体を守っていく実践的な手法を身に付けることができたと考える。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・ 指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校
人権課題	インターネット による人権侵害	対象学年・ 取り扱った教科等	全学年・LHR
		時数等	5
目標・人権教育のねらい	スマートフォン等の普及により、ネットトラブルに巻き込まれたり、無料通信アプリを使用した誹謗・中傷や、ネット上でのいじめ等の事案が数多く発生したりしている。これらの事案に対処するために、スマートフォン等の利用に関わるトラブルとその対処法について正しい知識を習得するとともに、相手の気持ちを考え、思いやりの心を持つことの必要性・重要性についての理解を深め、正しく、有効的に機器を活用することのできる態度と技能を高める。		
実施した内容	各HR教室にて、スライドを見ながら情報モラルについて学んだ。既習事項の確認、SNS上のトラブル、インターネットを安易な使用によるリスク、トラブルに巻き込まれた際の相談機関について。		
工夫した点	<p>既習事項もあるが、改めて確認することで、大切なこと・自分にも深くかかわりのあることだと強調した。また、ネット上のトラブルについては、自分たちが普段使用しているSNSアプリを例に扱うなど、自分の身近なこととして考えられるよう工夫した。</p> <p>情報モラル、人権侵害は看過できないことであり、誰もが当事者になる可能性がある。そのため、被害・加害という見方だけでなく、「自分に深くかかわる」人権課題として考えられるように教材や指導方法、指導の場面の見直しを図ってきた。特に人権学習を特定の教科や人権LHRに限定せず、毎日の生活につながりを持たせるため、他教科での情報モラルの指導の機会も念頭に置いて、既習事項は「深める学習」を、まだ定着していない初めて出会う事柄については丁寧な説明、具体的な事例を用いて生徒の意欲・関心を引くということを心掛けた。</p>		

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

情報、保健体育、家庭、公共

事業成果

知識的側面

学習内容について「よくわかった」「わかった」が1年で100%、2年で99%、3年で99%とあった。また「新しいことを知ることができた」でも1年が89%、2年が76%、3年が75%であった。「知っていた」という回答も少なからず見られたが、多くの生徒にとって、情報モラルについての理解を深めることができたと考える。

価値・態度的側面

「興味が持てた」と答えた生徒が1年で92%、2年で97%、3年で95%、「自分自身の経験と結びつけて考えられた」と答えた生徒が1年で93%、2年で93%、3年で95%と、身近なSNSについて興味関心を持ち、自分の行動を振り返って学ぶことができた。

技能的側面

「興味が持てた」と答えた生徒が、どの学年においても90%以上おり、また、「今後活かそう」と答えた生徒が1年で93%、2年で96%、3年で94%となった。感想では、「今後、SNSに投稿する際には、しっかり判断してから投稿したい」、「むやみに画像をあげない」、「個人が特定できるような情報は載せない」といったものが見られ、今後の自身の行動について考える機会になったと考える。また、知識を身につけ、意識的になることで、実際にSNS上でのやり取りの中での気になることについて、学校へ相談してくるというケースもあった。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・ 指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校	
人権課題	子ども・女性・ 性的指向、性自認	対象学年・ 取り扱った教科等	第3学年・LHR	時数等 4
目標・人権教育のねらい	<p>現代社会において大きな社会問題の1つである「DV」（ドメスティックバイオレンス：配偶者や恋人などの親密な関係にある相手を暴力によって支配すること）について学び、背景にある現代の社会構造や、自分を主体とした人権に気づく機会とする。また、若者に多い「デートDV」についても学びを深め、こういった問題に対する人間関係の作り方、DVに遭遇した場合にどのように対応すれば良いかについても学習し、実践的態度の育成を図る。</p>			
実施した内容	<p>立命館守山中学校・高等学校の養護教諭を講師として招き、デートDVについての講演をしていただいた。具体的な事例を挙げて説明してもらうことで、身近な問題であると考えさせることができた。また、事前アンケートでDVチェッカーを行い、講演ではその内容についての解説もしていただいた。</p>			
工夫した点	<p>近隣の高校の先生に講師をお願いし、直接会って打ち合わせを行ったことにより、本校生徒の実態に合わせた指導内容とした。特に、講師の先生が用意した短時間の動画が生徒の実態や意識に近いものとなり、DVについてわかりやすいものだった。また、事前アンケートの中でDVチェッカーに取り組んでから講演を受けることで、自身のDVに対する考えについて省み、あらかじめ身近なこととして認識したうえで講演に臨むことができた。</p> <p>3年生は2年次に「性と生命」の講演を聞いている。本校の人権学習はこれまでの学習や理解を自分の中でどのように深めていくかということを考えている。DVを性に限定せず、支配や被支配といった関係を考えながら、よりよいパートナーとの関係やチームの関係の実現に向けたものとしている。</p>			

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

保健体育、家庭、公共

事業成果

知識的側面

デートDVについて、事前アンケートでは「聞いたことはあるが、詳しくは知らない」「まったく知らない」と答えた生徒が96%いたが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が約98%、「興味が持てた」と答えた生徒が95%、「新しいことを知ることができた」と答えた生徒が約95%と、理解を深めることができた。感想の中でも「DVチェッカーがわかりやすかった」や「デートDVは身体的なもの以外にもあることを学んだ」「今のうちに気づくことができて良かった」といったものが見られた。

価値・態度的側面

自分自身（の経験）と結び付けて「よく考えられた」「少しは考えられた」と答えた生徒が96%と、「興味が持てた」と答えた生徒も95%、感想の中でも「いろんなことがDVになると知った」「イギリスの警察が紅茶に例えて説明していた動画がわかりやすく印象に残った」「自分にも関わってくるからだから、とても重要なことだと思った」「将来に役立つことを教えていただきありがとうございました」といったものが見られ、デートDVについて学んだことを今後の生活に活かしていこうとする意識も見られた。

技能的側面

「今後に活かそう」と答えた生徒が95%、感想の中でも「今回の講演のことを忘れずに気をつけていきたい」「自分の言動にもっと気をつける必要があると思った」「デートDVは男性から女性というイメージがあったので、自分が固定概念を持っていることに気づけた」といったものが見られた。また、生徒たち自身が持っているこれまでのデートDVに対する意識が変わっただけではなく、被害にあったときの具体的な相談窓口をスマートフォンで検索するなど、今後の行動につながった。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・ 指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校		
人権課題	子ども・同和問題	対象学年・ 取り扱った教科等	第2学年・LHR	時数等	3
目標・人権教育のねらい	現在未だに「部落問題」が残っていることを知り、あらゆる差別事象が不当なものであり、差別される側に大きな傷を残すということを認識するとともに、生徒が自分自身も差別をなくしていこうとする推進者であるという自覚を培う。				
実施した内容	各HR教室にて事前学習として、スライドを見ながら同和問題に関する歴史的な流れについて知識を学び、「部落差別問題」とは何かについて、動画を見て考えたり、周りとは話し合ったりすることにより理解を深めた。講演会では、以前、本校で勤務をしていた方を講師に招き、前時の内容（基本知識）の確認をしながら、今なお残る部落差別問題について、自分の経験や具体的な事例を挙げながら話をしていただき、生徒たちが理解を深める機会を設けた。				
工夫した点	当事者がいるかもしれないことを念頭におくことや指導に内容について事前学習のためのスライドを作成した。該当学年と事前打合せで共通理解を図ったうえで、生徒が興味関心をもって前向きに学ぶことができるよう、写真やクイズを入れるなど工夫した。HRでの学習は複数体制で行い、生徒の様子を丁寧に観察し対応できるよう心掛けた。講演では事前に講師の先生と打ち合わせを繰り返し行い、生徒が興味を持ち、自分にもかかわりのあること、現在も部落問題が残っていることと考えられるよう、講師の経験や具体的な事例を取り入れるなどの工夫をした。また、教員自ら自身の部落差別問題についての思いを語り、立ち位置を示すことにより、共に差別をなくしていこうと呼びかけ、実践的行動を促す機会を持った。				

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

特別活動・日本史

事業成果

知識的側面

部落差別問題について、事前アンケートで「これまで学習したことがある」と答えた生徒が約90%とあったが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が約99%、「興味が持てた」と答えた生徒が96%、「新しいことを知ることができた」と答えた生徒が約85%と、理解を深めることができた。また講演の感想の中では、「自分には関係のない、遠い話だと思っていたが、そうではない身近にある問題と分かった。」や、「今もこうした問題があることに驚いた。」「こうした差別はおかしい。」といった意見が多く見られ、講演を聞いたことで、より理解を深めることができたと考える。

価値・態度的側面

自分自身（の経験）と結び付けて「よく考えられた」「少しは考えられた」と答えた生徒が83%と、「興味が持てた」と答えた生徒も96%、感想の中でも「身近にある問題。今もある問題。」「話題にしなければなくなると思っていたが、それではダメ。正しい知識をしっかり学ばないといけないと思った。」「自分が差別をしないで終わらず、周りで聞いたら、ちゃんと注意できるようになりたい。」といったものが見られ、講演での話は、生徒に深くささり、部落差別問題が身近な問題であることに気づき、態度として示していこうとする意識が高まったと考える。

技能的側面

「今後に活かそう」と答えた生徒が96%、感想の中でも「自分の考えを改め、今後に活かしたい。」「自分の言動にもっと気をつけたい。」「差別をなくすために、まずは自分が正しい知識を。」「今も部落差別問題があると認識を改められた。」といったものが見られ、部落差別問題について理解が深まったこと、また、自分が差別をしないでとどまらず、差別をなくすためにできることを心掛けるといったこと、差別が時に人の命を奪うことといった、大切なことを考える良い時間になった。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・
指定都市名

滋賀県

学校名

国際情報高等学校

人権課題

性的指向、性自認

対象学年・
取り扱った教科等

第1学年・LHR

時数等

5

目標・人権教育のねらい

- ・性のあり方は男女の二通りだけではなく、一人ひとり違うことを知るとともに、性的マイノリティーに対する差別や当事者の生き辛さを理解する。
- ・性的マイノリティーに対する差別や偏見をなくすために自分ができることは何かを考える。
- ・性的マイノリティーに対して自分が持っている偏見を見直し、より正しい判断と行動につなげる。

実施した内容

各HR教室にてスライドを見せ、「多様な性・多様な生き方について」や「性的指向や性自認とは」、「性のあり方は一人ひとり違う」など基本的な知識を学び、「性の多様性」とは何かについて考える時間を設けた。講演会では、本校SCを講師に招き、前時の内容（基本知識）を確認したのち、「LGBTQの人に会ったことがないが、本当にいる？」や「日本では同性婚ができない？」のようなよくある質問に対し、どのように考えるかを一緒に考える時間を持った。

工夫した点

各HRの事前打合せにおいて、学年団教員と当事者がいる可能性を念頭におくことや、生徒に理解を促したい内容について共通理解を図り、スライドを作成した。

講演では講師と事前に相談の上、事前学習の内容と講演内容が重ならないよう、また、生徒が疑問に思うであろう事柄を想定して調整したことで、生徒にとってより身近な問題であると捉えられる内容になった。

当事者の話や短時間の啓発動画などを見たり、クイズを取り入れたりすることで、各生徒が興味関心を持って自ら考える時間を設けた。また、ペアワークを行うことで、自分とは異なる意見を聞き、自分の考えを省みることによって、学びを深められるようにした。

本校では早期から服装違和感について議論を重ねてきた。性的マイノリティーをどこか自分とは関係ない世界のことととらえず、身近な事として認識できるよう働きかけを行っている。また、心配ごとや困り感に対応できるよう、教員間で共通理解を図るとともに、相談先についても案内している。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

家庭、保健体育、公共

事業成果

知識的側面

性的マイノリティ（LGBTQ）について、事前アンケートでは「聞いたことはあるが、詳しくは知らない」「まったく知らない」と答えた生徒が64%いたが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が約98%、「興味を持てた」と答えた生徒が96%、「新しいことを知ることができた」と答えた生徒が約88%と、理解を深めることができた。感想の中でも「今までも学習したことがあったが、わかっていなかったことがよくわかった」といったものも見られた。

価値・態度的側面

事前アンケートでは「身近な存在」と答えた生徒が55%であったが、感想の中では「自分がわかってないだけで、身近にもいるかもしれない、と思うようになった」とか、「（当事者の）現状についてもっと知りたい」といった意見も多く見られたことから、性自認について関心を高めることができた。また、「自分自身（の経験）と結び付けて考えることができた」と答えた生徒も85%おり、感想の中でも「もしかしたら、あの時...」と行動をふりかえった生徒も見られた。

技能的側面

学習内容を「今後に活かそう」と回答した生徒が98%おり、感想の中でも、「もしかしたら、今後自分が相談を受けるかもしれない」といった場面を考えて生徒、講師の先生への質問を書いてきた生徒も見られ、多くの生徒が今後の自分の行動について考える良い機会になったと考える。また、学習後に「自分の心の性を判断するって、どういうことか。」「話しやすい環境は、どうやって作るのか。」「カミングアウトされたときの対応をもっと詳しく知りたい。」と講師の先生と個別に話をした生徒もいた。